

幼児心理学の最近の傾向と世界の視聴覚教育



波多野完治

最初に幼児心理学の最近の傾向というように、それから世界の視聴覚教育・幼児教育の話を行います。

最近幼児というものを考える考え方が変わってきました。先日朝日新聞にこの学校の先生でいらっしゃる平井信義先生が幼児教育についての最近の日本の発展というものを書いておられました。日本の幼児心理学の研究が世界でもリードして大変りっぱなものだと述べてあります。確かにそうでありませんが、しかし日本の学問が進めば進むほど外国との交流は必要になってきて、外国のことを調べる必要はふえていても減っていることはないのです。具体的にどんなことが変わってきたかといいますと、まず大きな特徴の一つとしてアメリカの研究の考え方とソ連のそれとが大変似てきたということがあげられると思います。

アメリカの研究とソ連の研究

今から三、四十年程前には、ソ連の学問はアメリカの学問などを、いわゆるブルジョア科学である、そして行詰っているということをしていましてそれを排撃するといえますか、これとは全然別な行き方をとって新しい科学をこしらえるという方向をとっているのです。一方アメリカの方ではソ連の学問の良い所はほとんどとるんですね。ことに今から十五、六年ばかり前にソビエトでパブロフ的段階ということがいわれ、パブロフの条件反射学を基礎にして心理学をこしらえなくちゃいけないという考え方で新しい研究に踏みきった。そうしますとソ連のような国では、これが重要だと、重点施策ということになりますとそこに非常にたくさん金をつきこんで、それで研究が進むわけですね。その結果ソ連の幼児心理学、幼児教育がたいへん進んだのです。このようすは日本でもリユプリンスカヤという人の本が翻訳されておりますか

ら多少わかるのですが、大変な勢いでどんどん進んだのです。一方アメリカではその良い所を皆とって、自分の方に使うということをしているわけです。それを見てソ連の方は、これはどうも自分たちの方がおかしかったのではないか。自分たちの方では、あいうブルジョア科学はだめだから、アメリカのやった研究のいい所などはあんまり見ないで独自のものをしようとしていた。そうすると非常に損なのです。良い所をどんどん取ってその上にいろいろのものを積みあげていけば、もつとはやぐできるわけです。それでソ連もこれはいかんとまけずにアメリカの研究をとるようになってきました。

その結果が今日では、もちろん基本的哲学というものは違いがあるのですけれども、アメリカとソ連の幼児心理学が大変似てきた、大変水準が高いものになってきたということがいえるのです。わが国のような国情でもそれを使って日本の子どもを幸福にしてやるということができる状態になってきたわけです。

このアメリカとソ連が近くなるのについて、二つの力が大変大きく働いてきました。その一つは今年で結成二十年になりますユネスコです。ユネスコには最初ソ連及びソ連の衛星諸国は入っておりませんでした。しかし五年程たって一九五四年にソ連及びポーランド、チェコその他の国が入りました。そうするとユネスコへ職員を派遣する権利と義務が生ずる。それでソ連の有力な学者

や文部省関係の実務家がユネスコへおおぜいくるようになりました。一九五四年に加盟したわが国で、一九五八年にはじめて、ユネスコ主催の国際会議が開かれました。その時にはソ連の代表もきまして、いわゆる自由主義諸国と大変な勢いでけんか腰の討論をいたしました。その会に顔を出していた私はびびくりしたのですが、それが一九六〇年頃から、だいぶ変わってまいりました。

同じ職場にいて同じ仕事をしているし、それにユネスコの究極の目的は戦争をなくすということでしょう。平和ということでしょう。人間の心の中から戦争が起るのだから心の中を平和にしないでならぬ。そういうことでユネスコができたのですからどうしても仲よくしていかななくてはならない。それでソ連と自由主義諸国とが互いに良い物を取りこするという形になったのではないかと思えます。それで今日はユネスコが主唱者になってお互いが大変緊密に国際会議を開いています。もう一つは東欧諸国がハンガリー事件のあとで、東欧という国は、ソ連の考え方と自由主義的の西欧的考え方の両方の良い所をとっていかないと成り立たないということを考えたらしい。それでそういうような仕事をしようになり、ユネスコを軸として多くの国際会議が東欧で開かれました。これがまずソ連と自由主義諸国との間の考え方の交流をすすめたのです。わが国ではまだソ連に対する恐怖心、認識不足がありますが、ヨーロッパの人たち、特にイギリスとかフラ

ンスの国においてソ連の実情が非常によくわかり、これに対する恐怖心、不信任がかなりなくなってきたので、それが幼児心理・幼児教育方面における両方の歩みよりを結果したのだと思います。幼児の保護施設あるいは幼児教育施設においてソ連の影響はつよく、同時にソ連におけるモンテッソーリ法の影響は日本では考えられない程大きいのです。いろいろの形でこれが幼児教育の中に浸透しているのです。

発達と教育

第二の特徴として申し上げなくてはならないのは幼児の発達の姿を動物の発達と大変違ったものとみるということです。動物の発達とは、種族的に遺伝として伝えられたものがあり、それは生まれた時本能とか反射という形で発現するわけです。それからあと動物は、毎日毎日暮らしていく間にいろいろな物を覚えていくという発達をしていく、しかしこの発達は一代かぎり、それが死んでしまえば子どもには今いったことは伝わらない、すなわち種族的発達と個人的発達とがただです。この種族的発達の方は系統発生とい個人発達は個体発生といえます。しかし人間にはもう一つの発達の姿というものがある。それは人間は文化を持っていて子どもは生まれるとすぐその中へ放りこまれているということ。人間は自然の中ではなく、文化の中に放りこまれてそれを学習するという形で成長してきたのです。その点が他の

動物と大変違う。そこで系統発生と個体発生との中間に出てきた社会的系統、あるいは社会的個体というものはないのであろうか、どうしてそういうものが人間にできたのであろうか、それをどのようにすることが人間において発達の姿なのですが、それはどんなふうに行なわれるか、という問題がでてきたのです。

この問題を見事に解決したのがソ連ではレオンチエフという学者で、彼は去年そういう発達についての基本的考え方を発表したのが認められてレーニン賞を授けられました。これによって社会的なものを通して個体発生と系統発生が一つになるという形が子どもの発達の姿であって、発達と教育とは区別することができない。犬や猿などですとそれが大体わかる。例えば教育するとチンチンやおあずけができると区別できるが、人間では区別できないで教育と発達は一つであるということがわかったわけです。それでは子どもはどんなふうにしてそれを獲得していくのだろうか。その所に彼の考えの一番の中心があるわけです。その発達の原理を彼は自己化という言葉で現わしました。これはあまり良い訳ではなく一番良いのは、ものにするという言葉—自分のものにして完全に使えるようにしたこと—ですすからものにしたという訳の方が本当はいいんですが、名詞にしにくいので自己化という言葉よりしかたがないのです。アブロブリエーションという言葉です。これがどういうことを説明するのに、言葉で現わすのが一

番良いと思います。

例えば子どもがハイチャイという言葉を感じる。この言葉は世の中に外にあるんですね。つまり子どもには子どもにはないものを摸倣して覚えたのだらうと今までは考えていたが、彼はそうではないと考えた。子どもはハイチャイという言葉を使う能力を持っている。しかしながらそれがハイチャイという言葉にまともかバイバイという言葉にまともかは環境による。つまり子どもにおける発達ということは人間においては身体的器官の成長、成熟ということが前提となっていることはたしかですが、それだけでなく外にそれに相応する文化があつて、それを自分のものにするという形にすることによってできあがる、というふうに考えたのです。従つてこの過程は模倣とか影響とかいうような受身的な形ではなく、子どもがみずから自分の能力を働かして、こういうことをしようとする能動的な働きなのです。そういう能動的な働きをできるだけ認めてのばしていくという形でないで発達ということはできない。これは言葉についていっただけですが、それだけではない。食事をするについてもいえます。わが国においては、お箸・お碗・お茶碗をえるようになりますし、ヨーロッパではお皿、ナイフ、フォークを使うことができますようになる。日本人は魚を食べるのが上手ですし、ヨーロッパ人は鳥を食べるのが上手です。それぞれの文化の中でそういうことができなくて

はならない。そういうことが子どもに対しては運命的なものとして与えられている。それがなければその社会では暮らせないので、そこから、そういう自己化というのが能動的な過程であつて学習というのは、外にあるのをそのまま我々が鵜のみにするのではなくもう一ぺん作りなおしているのです。そしてそれを大急ぎでやるための方法が教育です。どうしても中学卒業するまでにやらなくてはならない。先生はそれを手助けすることができます。一番大切な手助けの方法は順序をきちんと決めて、こういう順序からこういう順序へいけばよいということを決めてすれば子どものものになります。このことをアルゴリズムといいます。

ほとんど同じ言葉で、アメリカではプログラムといつていまい。しかしめちゃくちゃの順序でもプログラムですが、そうではなくいわゆるティーチングマシンの方の言葉を使うとスマールズトップで一定の順序がきちんと立っているプログラムのことをアルゴリズムと考えればよろしいのです。その順序を中身の方から細かく決めた学者はソ連でもアメリカでもなく、それらに対して独自の立場を立てているところのフランス系の心理学者であるピアジェという人であります。彼の考え方も非常にレオンチエフに近く子どもが成長—学習していくということは世の中に存在するものを自分にふたたび作りだしているということであると考へ、それをつくり出すにはどうしたらいいかという問題を考へま

した。彼の考えによれば自己化のための一番基礎となるのは、**ヴェマ**、これは図式と訳したら良いと思いますが、つまり頭の中にあるスケッチみたいなものだと思えばいいのです。たとえば子どもの場合時計とはどんな物？と聞くと時間を見るものと多分いうでしょう。そういうものが子どもにおける時計のシエマというものです。このシエマは概念になっている。言葉でいいあらわすことができるということから、概念的シエマとか言語的シエマとっていいかもしれない。しかしその概念的シエマができるためには、このアルゴリズムの当然の前提として、**感覚運動的シエマ**がなくてはいけない。つまり時計を見るところという行為ができなければ、概念はできませんから、そういうふうにしてシエマを使っているいろいろなことをやってみると、うまくいく時もありうまくいかない時もある。うまくいかない時はうまくいくまでやる。うまくいった時が結局そのシエマができた時といえます。

今の教育ママは非常に子どもが失敗することをいやがる。しかし正しいシエマができるためには、いろいろやってみて一つだけこれなら正しいということがわからないと良いシエマができません。ですから失敗ということは大変なこと、ことに五、六才までの間は失敗をくり返していくことは成長していくために大切なのです。しかし幼児の場合はそうではありませんが、もう少し上になったら二度同じ失敗をすることがないようにした

方がよい、失敗から学べばこの次これをやらなくてもいいわけでしょう。そのことをこれから少しお話しします。

感覚運動的シエマ段階というのは、こうなればこうなるということから先のこと、頭の中で考えられない時期で、だいたいこの時期は一才半ぐらいまでです。それから二才半から三才ぐらいまでの時期に頭の中でいまより先のことを考える力ができてくる、

こういうことを表象能力とか映像能力とかいって、例えば電車とはどんな形のものかを頭の中で描けるようになる。そうなる今度は先を考えるということができるようになって失敗をしないためにどうしたら良いかが見当がついてきます。しかしながら子どもはまだ経験が少ないですからいたる所で失敗をしてしまう。

その度に怒られたらどうでしょう。子どもは何もできなくなってしまう。ですから失敗することを恐れさせてはならない。又失敗をする度に叱言をいってはならない。同じ失敗を何度も繰返す時は、同じ失敗をしないようにするにはどうしたらいいかを親の方で考えなくてはならない。そんなふうでシエマというものを働かせてその上にこれから自分のやろうとする物を積み重ねていくということになるわけです。すなわちシエマという物は子どもが生まれた時に持っていた反射と本能、あるいは感覚運動的能力、可能性を実際に働かせることによって次の段階へ到りくる頭の中のスケッチということです。したがってシエマという物は一

つではない。一万も十万もできるかもしれない。しかし、それを全部使うことはむずかしいのでシエマとシエマを組み合わせてもつと高次のシエマを作りあげる、これが知能の働きです。

同じようなシエマをいくつも組み合わせると高次のシエマができてきます。例えば犬、猫、狐などを組み合わせると動物というシエマができます。同時に全然違ったシエマを組み合わせるとということもあります。例えば自転車に乗るというシエマでは、手の動きというシエマと足の動きというシエマの両方の動きがうまくつり合わないときません。シエマの重ね合わせということが人間の発達に関係してくる。いつでも自分が持っているシエマを使って外の物を自分の中へ取入れる自己化という形を通じてやって行かなくてはならない。こういう考え方ですと子どもの獨創性という言葉はあんまり面倒な問題でなくなる。いままでの考え方ですと真似て覚えるということですから、自分の新しいものをつくりだす時にどうしたら良いだろうかと大変むずかしい問題がでてきたのですが、この自己化の原理で、それを助けるような方法で教育をしておけば、獨創性は教育していく間に自然に伸びていくわけです。そしてこの考え方が獨創性を伸ばすのに大変役に立つことがわかるのです。そういう点から幼児の教育での適応を考えてみますと、幼児の段階での外国語の学習はソ連やアメリカ、イギリス、スエーデンなど比較的大国で文化が進んでいて外国との交

渉を重要視しなくてはならない国程、問題となっています。わが国でこれをどのように解決したかと申しますと、わが国では二つの言葉を覚えるのは必ずしも困難なことではない。これを二つの国の言葉として教える時にむずかしい問題がある。単に言葉として覚えるのなら幼児にとつて外国語だろうと自国語だろうと変らない。又そういう変らない方法で教えれば幼児に英語を教えることはちつとも困難ではない。又ハイチャイとかバイバイなどのように一つの事柄に対して二つの言葉があることもそんなにむずかしいことではない。しかし英語の言葉を使う時は英語ばかりなんだよということがむずかしい。だから外国語を外国語としてまとめ整理するのはかなりむずかしい点があって、これをやろうとすると知能がどうしても、小学校三年位までに大体、一才位遅れると見ていいでしょう。それで、私は外国語を教えるには知能指数にして一才以上進んでいないと無理で、そのため I.Q¹⁵から 125 の子どもが良いと考えているわけですが、それはエリート教育で、けしからんという考え方もありますのでその方の意見をつけ加えておきます。こういうことは自己化あるいはシエマというものを基礎とした学習です。そんなふうなわけで幼児教育の基本的な考え方はモンテッソリーの頃とあまり変っていないけれどもそれを説明する理論が大変高次になってきた。そしてそのことでいろいろの方面にはね返りがあるということがわかったと思います。

幼児期と生涯の発達

幼児心理の現在の傾向の話の中でもう一つだけ残ったのがございます。それは幼児心理というものをそれだけ切りはなして考えないで人間の生涯のうちの一つの時期という立場でみるということです。今までも幼児の時期は大事な時期で一生を決める時期だと言うことを考えていたのですが、それを具体的に少年の時期に、青年の時期にあるいは老人の時期にそれぞれ幼児の時期がどういう意味を持っているのかという所まで具体的に研究するということはなかった。ところが今日では生涯の最初の時期として眺め、終りの方をつかむために最初があるという意味で生涯を通じての幼児の時期をとらえる形になってきました。

そのように眺めてみますと親や先生がなに気なしにやっていたことで一生に大きな影響を持つことがいろいろあるだろうということがわかってきたのです。幼児の時に幼稚園でいじめられたのが大変なさわりとなってその人の一生を決めたということで幼児の時期の一生に於ける重要性という物が大変重要になってきたものですから、これを眺めるという傾向がでてきたのです。これはいわゆる精神分析の方で非常に大事にしていた考え方が、今日では実験心理学の方でも科学的に研究するようになってきました。幼児の時期の影響について、例えば、昔は幼児がどろぼうするとかうそをつくとか末恐ろしいといって非常にこわがった

ものですが、幼児の段階では誰でもうそやどろぼうをやるが、それがだんだん悪いことだとわかるとだんだんやらなくなるということが幼児心理学でわかったのです。しかし又どろぼうが小学校三年位からはじまるとこれは非行に通じますし、うそも小学校四、五年位からつきだすうそがその人の性格と結びついてくるのであり幼児期のうそだとか、泥棒とか言うものは生涯を通じてませんが、別の物が通じる、つまり不安傾向、欲求不満がそのまままっていってしまう問題が生涯を左右するのです。

そういうことから幼児に特にテレビを見せるということがどういう意味を持っているか、あるいは視聴覚教育の方法としてどんなことがあるかをお話ししようと思います。

幼児と視聴覚教育

日本のテレビは幼児教育の立場からいえば最も恵まれた国であります。又他方からいえば最も不幸な国です。恵まれた方からいいますと幼児番組、特に幼稚園や保育所のための番組が一週間に数本あるというのはわが国だけです、特にそれがカラー放送であるということはどの国でもないのです。ただ幼稚園や保育所からの要求から申しますと年長組と年少組の番組の分化をやって欲しいということになるのだと思います。では不幸な点とはいいますが、わが国ではある程度幼児が一番影響を受けやすい暴力が肯定されている所があり、いろいろの番組で暴力が行なわれ、そ

れを幼児が見ることがかなり多いということです。

これは世界で五、六年前まではやかましい問題でしたが、一九六〇年頃から研究が進行してこれから述べますような結果がでてきたもので、暴力的番組は減らす、少なくとも幼児が起きている間はやらないという傾向になったのです。

一九六〇～一九六三年頃までにかけて、アメリカでバンデューラという心理学者がテレビの幼児への影響について研究したのであります。従来の研究の結果では、その幼児に与える影響は非常に深刻であるという説と、かえって精神衛生的に見てよろしいという意見とが対立しておりました。後者の方は多く心理学者や精神医学者、精神病学者がだしたもので幼児の生活は非常に多く禁止にとりまかれていますので必然的に欲求不満が生じるからそれを解消するために暴力的番組は非常によいという考えでありました。そこでバンデューラはスタンフォード大学の付属の幼稚園の五才から七才の子どもを使って暴力をみせたわけです。

しかし暴力番組といっても幼児がおもちゃを投げつけたり、人形を踏みつけたりあるいは縫いぐるみの犬をいじめるとい程度の暴力です。そして三つの番組を作りました。一つの番組では子どもが欲求不満の状況に置かれた時乱暴をして、そのためにお菓子がもらえ、欲求不満が解消した番組で、もう一つは乱暴したが何ももらえないで罰を受けたという番組、もう一つは何もそうい

うことと関係のないごく普通の景色が映っているような番組の三つを用意して同じ位の三組の子どもにみせた。そうすると暴力番組に対しては子どもたちは大変憤慨するんです。そして暴力をふった子が罰を受けるといい気味だ、ああいうふうになるのが当然だと批評をする。すなわちこの年齢になりますと、そういう番組を見た場合それに対して正当な評価をしていることがわかる。

その意味では暴力番組は子どもにも悪い影響はないことがわかったのです。しかしながらバンデューラはそこで実験を打ち切らないで、この三組の子どもを一人ずつ欲求不満の場に入れた。つまり一人ずつ部屋へとじ込めて御飯も牛乳もなにもやらなかったのです。そうすると見た番組の種類によって子どもの行動が大変違ってきたということがわかりました。景色を見せられた子は欲求不満の状況に入れられても別に暴力をふるわないでおとなしく待っているか先生を呼ぶという方法をとるが、暴力的なものを見た子はその番組の模倣が現われ、きっきの言葉でいえば自己化が現われ、その暴力を自分のものにしてなんとかしてその状況からのがれようとやりだした。その中で暴力が成功した場面を見た子どもの方が失敗した場面を見た子どもよりも暴力が多かった。

しかし失敗した場面を見た子どもといえども、暴力を見なかった子どもよりも暴力が多かったということがわかったので、バンデューラはこう結論をだしたのです。子どもは五才から七才ぐら

いになると暴力は悪い、自分があいうことをするのはよくない
ということがわかって、テレビに対する正当な判断をしているの
です。しかし自分がテレビで見たような同じフラストレーション
の場面に入られれますと、自分が悪いといっていたことがそこに
でてくるわけです。つまり幼児の場合には知っているということ
が決してそれができるということではない。それでテレビの暴力
番組の影響があるといわなくてはならない。

そこでアメリカではその研究が上院のいわゆるマスコミの委員
会で取り入れられて、番組の改革が起り、現在ではかなり幼児
に関するかぎり改善されています。すなわち家庭へ送られる番組
としては外国では幼児は非常に幸福になっているわけです。なお
バンデューラは自分の見せた番組はたった一べんの暴力が成功し
たり失敗したりするが、多くのテレビ番組では悪い人は何回も悪
いことをしてそれが皆成功するんです。そして終りの一回だけ失
敗し罰せられる。それでいいだろうか。もし子どもが成功したと
ころだけを見たとすればあれは成功したんだと思うかもしれない
い。もちろん幼児はあの人は悪い人ですよと母親から教えられる
でしょうし、自分でもあんな悪い人はけしからん人だと腹を立て
ているかもしれない。その場合幼児に対する影響力は罪悪感を
変える程の力はないかもしれないが非常に大きい。つまりわかっ
ちやいるけどやめられないということが起る。だいたい成功し

た場面を見た子どもの三分の二位にフラストレーション場面にい
られるとそれが再現しているのです。

わが国ではわれわれが文部省で調査した結果、暴力場面の影響
として夜眠れなくなる、トイレへいくのをいやがる、眠ってからう
なされる、夢を見るということが起って、子どもの精神衛生上
からもあまり望ましくない結果がでてきたのです。又理論的観念
として正しい道徳を持っているけれども、それが実際にはできな
いような、言行不一致の子どもをつくりだすという意味で暴力番
組は大変な影響があるということがわかったのはバンデューラの
調査の結果です。そこでわが国の問題として幼児に悪い番組を見
せないようにするにはどういう方法があるだろうか？わが国のテ
レビはNHKと民放の二本立てで民放は東京で六つか七つあって
非常に多い。こういう二本立ての形式を取っている国はそう多く
はない。例えばタイでは国营放送しかなく、フィリピンでは七つ
ばかりテレビ局があるがみんな民間です。民間テレビは非常に派
手にやっていて、幼児に対する悪い影響があるのではないかと心
配しているのですが、ヨーロッパの方では民間テレビは非常に少
なく、それを持っているといえども非常に厳格な統制のもとに番
組、その他にはつきりした規定もっています。

例えばイギリスではNHKにあたる局と民間テレビとそれに教
育テレビの三つが見られ、フランスではNHKにあたるところが

二つ出していて民間テレビはない。そしてイギリスなどのように強力な監督をしたらどうかということが考えられます。二年程前に放送法をこしらえる準備の会がありまして、私共がその時今のようなことを考えてああいうことをしてほしい、こういうことをしてほしいといった。これが国会で多少問題になったのですけれども、民間放送に対して監督を強化して悪い番組がでないようにすることは言論統制のおそれがあるから絶対反対という声があった。じゃあ統制しないでもいい、しかし一般の人が幼児にこういうのは困るじゃないかと腹が立った時、それがわかるように投書なりモニターの意見なりがどこかへ発表されるということをわれわれの答申に基づいて放送法では条項を入れたのですが、それが大変な反対に会いまして、放送法は廃案になって流れるということになってしまいました。

そこでわが国ではどうしたらいいだろうかという問題があります。幼児に対する影響の大きいことを考えますと国家的なんらかの監視が必要だという意見は妥当なものではないか、少なくとも現在のテレビが言論の自由を幼児まで広げていることについて、私にはなほだ疑問があるのではないかと思うのですが、現在の放送に関する限りなんともすることができない。ただ一つ方法があるというのは、幼児に関心のある皆さんが、悪い番組の時には、これは悪いんだということをもみんなに知らせるような方法、結局投

書とかある団体の議決という方法を取らなくてはならない。現在の法律である以上、そのためにどうしたらよいかというと、私はどうしても幼稚園保育所における放送教育の強化ということしかないと思います。テレビ・ラジオをできるだけ使う。そうすると幼児からゆうべこういうものを見たよ、こういうものが恐かったということが出てくるでしょう。そうすれば幼児に対する影響がどんなふうに見られるかということがみなさんにわかるわけです。そうすればみなさんとしては適当な処置がとれます。あまりテレビを見せすぎないようにお母さんに連絡するとか、幼児に話をしてあげることによって、それを緩和する方法も取れますね。

そんなことで放送教育の強化ということ以外に、現在の所幼児に対するテレビの影響を、なるべく悪いものを減らして良いものをふやしていくという方法はないと思います。

ところが現在のテレビ、ラジオのコミュニケーションの可能性は、日本で考えていたのとは大変異なった考え方の方へ世界的傾向がいつているのです。特にテレビは金がかかるけれども教育的効果は大変大きいから、これで今まで教育でできなかった人に教育しようという傾向が大変強くなってきたのです。幼児はこういうことはありませんが、働いているためにとか、僻地とか離島のため学校へ通えなかつた子ども、又大学は大変限られた人しか行かないが、それをすべての国民に解放するということをテレビで

やろうじゃないかという傾向がどの国でも大変強くなってきたのです。今年の秋から踏みきるだろうといわれて世界から大変期待されていることは、ポーランドで大学の前期二年は全部テレビでやり、その後試験をして通った人は大学へ入れてやるということです。同じようなことがイギリスでも起こりまして、労働党が選挙公約でテレビで大学教育をしますといったことからどうしてもやらなくてはならない。又高等学校程度では、わが国で通信高校というのがNHKで設立されました。高等学校の段階は非常にむずかしい時期なのでテレビでやるのは骨がおれるのではないかということでは他の国では踏みきっていませんが、わが国では来年には卒業生ができますからその効果がどの程度かがはっきりします。又中学校でもこれをやってイタリヤで大変成功しました。

しかし小学校と幼稚園、保育所は先生がついてテレビを見せるというのが本体ですね。しかし大人になってテレビだけで勉強ができるようにしつけておくという必要はあります。それでそのためにどうしたらいいだろうかという問題があります。幼稚園でテレビを見せているとジツとしていない。しかし幼児の場合に無理にジツとしておかせるとい必要もない。まあテレビを見るということが大変なことに違いありませんが、とんだりはねたりしたかったらその方がいい。そういうようなことで幼児をだんだんテレビにならしていく、それからテレビの見方をつかませてい

くことが大事です。テレビというものは、はじめはじまで大事なじゃないですね。大事でない所は目をつぶしてもかまわないのですが、大事な所はちゃんと見なくてはいけない。そういうことができるようにするには大体年長組の九、十月位にならないとできないでしょう。しかしこれは年少組から順々にやっていないと年長組になってもうまくいかない。そういうことで長いことかけて訓練されると、家庭でも非常にテレビを見るのが具合いいですし、小学校へ行っても強味ですね。一年生では、どこが大事なのかちゃんとつかむことは無理のようですが、幼稚園や保育所でやってきた子はちゃんとつかめる。幼稚園、保育所の訓練が大事で、つまり一貫教育の重要性すなわち四、五才頃からの幼児の学習に対する意味がここに非常に現われるわけですが、前にも述べましたように、わが国のテレビの状況は一方において非常に幸福であると同時に他方において非常に不幸なのですから、現在のところ幸福な所を利用して、不幸な所が減るように努力するほかありません。私共が不幸な所をなくすように苦心したのですがどうも言論の自由も大事ですし、私共の力だけではどうもうまくいかない。やはりそれまでは皆さんのお力によってこれを子どもの幸福にかえていくことが必要であると思います。

(お茶の水女子大学)

(日本幼稚園協会主催幼児教育講習会講演より)